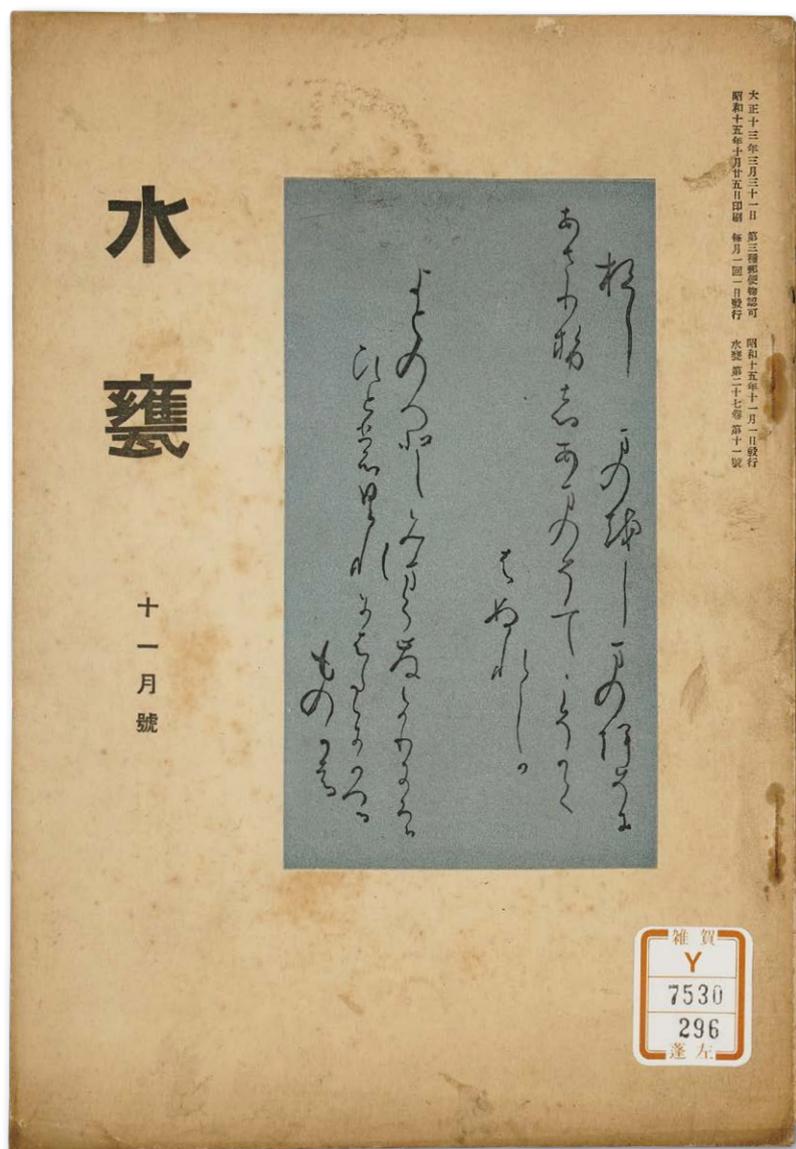


蓬 左

HÔSA



水甕

『銅人経』拓本を探る!?②

『銅人経』拓本はいつ尾張徳川家に来たか? — 御文庫蔵書目録から探る —

愛知県立大学教授 丸山 裕美子

前号では、蓬左文庫蔵『銅人脛穴鍼灸図経』(『銅人経』拓本の謎を三つあげた。その一つ目、「北京で作られたこの拓本がなぜ蓬左文庫にあるのか」という謎について、今号では尾張徳川家の蔵書目録から探ってみよう。

蓬左文庫の特筆すべき優れた点の一つに、文庫創設期からの蔵書目録が、歴代にわたって残されていることがあげられる。所蔵の典籍がいつ、どのように文庫に入ったのが、かなり詳しくわかるのである。

『銅人経』拓本一〇帖は、その第一帖の表紙に「敬公御遺愛之書／銅人脛穴鍼灸図経(拾帖)」という紙片が貼付されている(図1)。「敬公」は尾張藩初代藩主・徳川義直の遺愛の書籍だといえる。ただし、この拓本には、義直の蔵書印である「御本」印は押されていない。第十帖の冒頭に「尾陽文庫」の四方朱印が天地逆向き(一)に押されていて、「尾陽文庫」印は、確かに寛永期以降の義直の蔵書に使用されているのだが、二代光友の蔵書にも



図1 「銅人経」第一帖表紙

使用例が多い。印からは義直の蔵書と断定できないのである。

蓬左文庫の前身である尾張藩御文庫の最も古い蔵書目録である「寛永目録」(『御書籍目録』二冊、148-23)には、「駿河御讓本」とともに、義直が寛永十七年(一六四〇)までに蒐集した書籍が載せられているが、そこには『銅人経』拓本は見えない。

『銅人経』拓本の名がはじめてあらわれるのは、安永九年(一七八〇)に作成された「安永目録」(『馬場御文庫御蔵書目録』四卷四冊、148-46)であるが、そこでは光友の蔵書に、「銅人脛穴鍼灸図経石摺 十折」が載せられてい

る。また天明二年(一七八二)に河村秀頼によって作成された「天明目録」(『御文庫御蔵書目録』五卷五冊、148-34)は、これまでの目録と異なり、書目別に分類されていて、書名の頭に藩主・書目別の符牒がつけられているのだが、『銅人経』拓本は「医家」ではなく「雑」に分類され、「来 銅人脛穴鍼灸図経石摺 十折」とあって、「来」は光友蔵書を示す。つまり、天明二年まで、『銅人経』拓本は、二代光友の蔵書とみなされていたのである。

ところが、寛政年間(一七八九—一八〇二)に作成された「寛政目録」(『御文庫御書籍目録』二卷六冊、148-29、図2)にいたって、『銅人経』拓本は、義直の蔵書と認められることになる。「敬公御書籍」のうちに、

一 銅人脛穴鍼灸図経 「百六十四 唐石摺」 十折

此御折本、慶安四年役所江お渡候後、同年八月御前江上り候品之内ニ、石摺十折管入と申品有之候、此御折本ハ、享保御目録以来、御管ハ無之候得共、右品ニ而も可有御座候歟、相見申候付、此所ニ記し申候

とある。慶安四年(一六五二)八月に「御前」は藩主光友のもとに上げられた「石摺十折」というのは、「御書籍払帳」(『慶安四年御書籍払帳』一冊、148-14)に、「同(石摺) 同断(御前



図2 「寛政目録」

二上ル）十折 蒔絵箱入」とあるものを指す。義直はその前年、慶安三年に亡くなり、その蔵書は二代藩主光友に引き継がれた。受け取り目録「慶安四年尾張目録」（『御書籍目録』一冊、148―24）にみえる「法帖 十冊が『銅人経』拓本である可能性があり、さらにそれが藩主の御前に進上された」と「寛政目録」の作成者は判断したのである。「尾陽文庫」印は、光友が義直の蔵書を受け継いだ際に押されたとする説もあり、そうだとすると、まさしくこの拓本は、義直の蔵書であり、光友に継承されたものであるということになる。

「注目すべきは、この『石摺』が、『蒔絵箱入』

であったことである。「寛政目録」の段階でその箱はすでに無くなっていたが、蒔絵の箱に入っていたということは、これがとても貴重な贈答品であったことを示唆している。

「石摺」は、拓本のことと、「石本」とも称されたが、江戸時代には、唐船からふねによってもたらされた高価な輸入品であった。蓬左本は、一九九〇・九一年に一度修復がなされて表紙が付け替えられているが、もとの表紙もきちんと保管されていて、その表紙は薄手の絹織物（縞子織か）であった。装丁は日本で行われたらしい。拓本そのものも高価であったが、さらに高級な絹織物の表装に仕立てられ、蒔絵の箱に納められていたわけである。

ちなみに、日本にあるもう一つの『銅人経』拓本は、宮内庁書陵部にある（書陵部本）。書陵部本は、文化三年（一八〇六）に幕府の医官であり江戸医学館の主宰者（督事）であった多紀元簡たきもとやす（二七五―一八一〇）が購入し、元簡自身が4冊に装丁したもので、元簡による「拓本鍼灸図経考」が附されていて入手の経緯が知られる。それによると、元簡は『銅人経』拓本を入手したいと久しく探し求めていたが、なかなか入手できなかった、自宅が火災にあって手元不如意な中、やっと売ってくれる人があって「驚喜」して購入した、「元・明・清の書画廿余幅」を売ってその費用を得たこと

が記されている。

『銅人経』拓本は、元・明・清の書画二〇余に匹敵する高価なものであったのである。「人、我（元簡）を書淫しよんと謂はむ。人、我を書癡しよちと謂はむ」―元簡の筆致は、愚かな書物狂いといわれようともかまわないという拓本入手の喜びにあふれている。

蓬左本はその裏打紙から、一六一〇年代以降に北京で作成されたことが明らかである。その後、義直が亡くなる一六五〇年までの間に、日本に舶載され、尾張藩主のもとにもたらされた。高級絹織物の表装、蒔絵の箱入りで義直に献じた―もちろん義直自身が購入した可能性もないわけではないが―のは誰なのか？

研究チームでは、今のところ、朝鮮通信使、尾張藩に召し抱えられた亡命明人（陳元贊ちんげんぱんなど）、義直と関係の深い尾張藩医官・儒者の堀杏庵ほりきやうあん（正意）、尾張藩御用もつとめた角倉素庵すみぐらそあんとその子角倉平次の名が挙がっている。筆者は、渡明経験もある医師吉田宗桂の孫であり、朱印船貿易で財をなし、義直の『類聚日本紀』編纂にもかかわった角倉素庵（あるいは子の平次）の可能性が高いのではないかと推測しているが、いかがであろうか？この謎の解明は、今後の課題である。

大工の図面の描き方

―「伊藤満作家資料」から

名城大学准教授 米澤貴紀

名古屋市蓬左文庫に所蔵される『伊藤満作家資料』は明治時代に活躍した名工・伊藤満作(守房、一八五九―一九一四)の家に伝わった大工関連の資料群で、満作自身の仕事と、彼の出身家である尾張藩に仕えた大工家・伊藤平左衛門家、東本願寺の大工で伊藤家と縁戚関係にある柴田家の図面や木寄帳等が含まれている。これらは江戸時代から明治時代に制作されており、大工家の時代の大変化へ適応する様子が分かる興味深いものである。前号に続いて本資料を紹介する本号では、図面の種類や描き方、特徴から大工の仕事を観察してみたい。

まず、江戸時代の図面について見てみよう。基本的な図面の一つ、指図は、柱とその間の壁や建具を描いて間取りを示す図面である。加えて、畳や板などの床の材料を書くこともあり、これを色分けして示すものもある。部屋名や柱間の寸法なども書き、建物の基本的な情報を表す図面になる。指図は現代の平面図とほぼ同じだが、理解しやすい。

同じく主要な図面である建地割図は、近世以

前の大工の描き方による図面である。建物の外観立面と、それを透かして内部の構造や意匠を部分断面として合わせて描いたり、側面立面図に正面から見た向きの断面を合わせて描いたりするもので、近現代建築では基本的に用いない。建地割図が使えるのは、寺社建築の多くが左右対称であるため、立面と断面の描かれていない部分は頭の中で補って全体像を得られるからであり、それが可能になるように考えて立面と断面を組み合わせて描かれる。例えば小屋組や屋内に架かる梁や組物を部分的に断面図で示せば、柱・梁・桁の組み方や小屋組といった建物全体の構造、組物の場所ごとの違いなどが一体として理解できるのである。軒先も断面が描かれることが多く、これは屋根のデザインを決める重要な要素である垂木と屋根面の勾配を図示しやすいためである。また、正面と側面の視点の異なる図を組み合わせると、慣れればであるが、部材同士の組合せ、位置関係が三次元的に把握しやすい。このように、建地割図は建物の全体像を想定できる人にとっては、複数の図面を突き合わせずに済む便利な描き方である。なお、墨線で引いた立面に、朱線で断面を重ねて描く図面も本資料中に確認できており、他の例を見ても、線の色も使い分けて一枚の図面に多くの情報を盛り込んだのが分かる。

これらに床組図や小屋組図など構造を詳しく示すもの、主要部の内観立面図や、絵様の実寸大

下絵といった細部デザインを決定、指示する図などが加わり、造営に必要な情報が揃う。

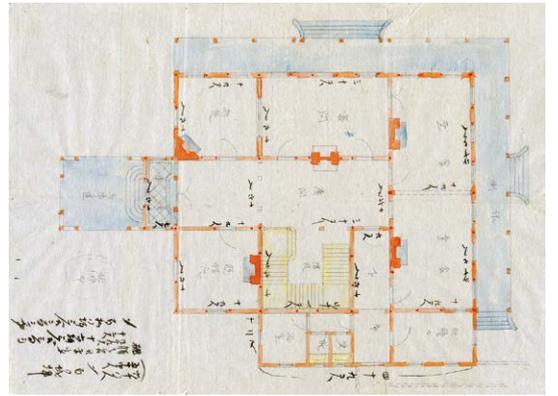
この他にも建物の柱の側面のみをまとめて描き、そこに組む水平材の大きさや位置を示すと共に、現場で使うものさしの目盛を記した図面(御本堂十分一之建杖二八三二、柴田左五之助、東本願寺阿弥陀堂)など興味深い図もある。

本資料の図面は多様であり、一棟の建物について多種の図面が揃う例も多い。また、建物の構想・検討段階と思われる図も確認できており、前号で紹介した木寄帳なども合わせて見れば、伊藤満作たちの設計から施工までの仕事を詳しく追うことができそうである。

さて、明治時代になると彼らは洋風建築も手掛けることとなり、それに合った設計図の描き方をしている。つまり、指図は平面図へとほぼ変わらないが、建地割図は、同様の図面はいくつか見られるもの、立面図と断面図、そして室内展開図(内観の立面を描く図面)に分けて描いている。例えば、金城ホテルの図面(二八九四)には、平面図、立面図の他に、建地割図のような立面と断面を組み合わせたもの、コンクリート造の基礎の配置、床組や小屋組などの構造を描いた図、部材の接合に使う金物の図といった建築を組み上げるのに必要な図面と、洋風建築にとって重要である階段周りや室内壁面、正面入口の車寄せなどの意匠、そして暖炉周りや煙突を詳細に描く図といった多くの種類の図面を作っ

ている。これらは現在の図面の描き方とほぼ同じである。柱頭の飾りや壁に付く線型といった洋館に欠かせない装飾も細かく描いており、その知識と技術をどこかで身につけていたのであろう。本資料の中には名古屋株式会社取引所や名古屋商品陳列市場、芝離宮西洋館などの洋風建築の図面があり、満作が寺社建築だけでなく、洋風建築にも通じていたことを示している。一方、江戸時代以来の寺院本堂では明治になっても変わらず建地割図を用いており、物件によって使い分けていたことが分かる。

図面を描く道具についても見てみよう。近代以降の建築製図では、鉛筆等で下書きをし、ペンで本番の線を描き図面を仕上げるが、江戸時代の大工はどのように描いていたのであろうか。彼らは、まずヘラを使って紙の表面を凹ませて線跡を付け、下書きや補助線を引いた。この線をもとにして、筆で墨を引いて清書する。この時、ものさしに直接筆を当てて線を引くことはできないため、筆に添えて持ち、定規に当てて引く「添軸」という道具を使った。これは現代でも用いる「溝引き」と同様の技法であり、筆を用いて細い線、曲線も綺麗に引くことができる。この作図の方法については、二代伊藤平左衛門も「金べらで和紙の上に筋を付けて下書きし、添え軸に添えた筆で定規にそって画く」と記している（「両堂再建物語」(3)「真宗」一九八五年三月号）。本資料の



「(芝離宮西洋館階下百分一図)」 蓬左文庫蔵

図面にもヘラの跡があり、この描き方が確認できる。また、図面の修正は上から紙を貼って覆いその上に再度描く方法や、絵様の実寸図に多く見られる朱で修正線を引く方法がある。

明治時代になると鉛筆を使った図面が出てくる。これには下書きのような図面から、比較的しっかり描いたものまであり、ヘラ跡よりも見やすく、消して修正できる鉛筆は便利だったのであろう。もちろん、正式な図面や、施主に見せるための図面は、墨・インクで清書をしている。建物の姿をよく見せるため、また使う材料の違いを示したりするために着色もしている。こうした色分けは江戸時代から行っているが、例えば芝離宮西洋館の図面(一八九〇)では、着色に水彩絵の具を用いているようで、明治二〇年代(一八八七―一九六)に普及したこの新しく便利な

素材も導入する進歩的な姿勢が見える。一方、明治時代になっても図面中の文字は変わらず筆で書いていることは興味深く、西洋建築を造るようになっていても、道具は大工本人が使いやすいで選んでいたであろうことが分かる。

このように、伊藤満作家資料の図面、特に江戸時代のもは典型的な大工の作図方法、図面の使い方を教えてくれる。そして明治時代のもは、寺社建築では伝統的な作図法を踏襲し、洋風建築の設計では近代的な作図法を用いて、それぞれを使い分けていたことが分かる。また製図に鉛筆を使うなど、新しい時代に適応していった様子も知れよう。本資料は現在も整理を続けており、引き続き大工の仕事や技術の高さを知る興味深い発見が期待される。その成果をまとめることで伊藤平左衛門や満作の活動の実態、作図方法や道具の変化の様子、大工家同士、大工・職人たちとのつながりなど、時代を乗り越えた名工の仕事の全容を明らかにしていきたい。今後もなんらかの形で資料の全体像と研究の成果を発表し、その面白さと価値をお伝えできる機会があればと考えている。

謝辞 本研究はJSPS科学研究費助成事業(科研費)基盤研究C(課題番号:22K04526)の助成を受けたものである。また、小山興詮^{おやまのぶあきら}氏に多大なご協力を頂いており、改めて謝意を申し上げます。

俳諧懐紙と千鳥塚(中)

「千鳥塚」なる語句が、鳴海の歴史記録に登場する最も古いものは、管見の限りにおいて、下郷家三代目当主、蝶羽の日記である。芭蕉の三十五年忌を迎えた享保十三年(一七二八)、命日にあたる十月十二日の日記に、次のように記す(括弧内は筆者による補足、以下同じ)。

・享保十三年十月十二日 晴天 芭蕉忌 非時一

汁式菜。酒さかな重引、夜食冷飯茶づけ、肴焼

鳥鮎鮎。一海(浜井寿鑑老、医師)、鯉走(丹下住、

蝶羽の妻おかんの縁者か)、一温(根古屋住、佐治丹右衛門、知足の妹お亀の息子か)、白之(蝶羽の長男、三

郎左衛門、西店の初代当主)、亀世(蝶羽の弟)六吟(こ

の六吟には蝶羽を含む)。

呼統や闇に手と引千鳥塚 蝶羽

蝶羽は「闇」と「千鳥」を織り込んで芭蕉を偲ぶ句を詠んでいる。この時点までに、千鳥塚が存在した証唆でもある。但し石碑はない。

生前芭蕉と親交のあった下郷家では、芭蕉の命日を芭蕉忌、蕉翁忌、あるいは単に翁忌と称して、同家の親類縁者を中心に医師・神官・僧侶などの連衆が集まり、句を詠んで追善の供養をおこなうのが毎年の行事となっていた。

この他、諸国から旅の途次に鳴海を訪れた俳諧師たちの紀行文にも、千鳥塚が登場する。

蕉翁五十年忌を迎える寛保三年(一七四三)、大

坂の俳諧師、艸々庵雪川がこの地を行脚して著した『熱田日記』に以下の記述がある。

・寛保三年六月八日 鍋盛に引かれて上野に遊

ぶ。蕉翁の塚、阿仁の塚など臥拝ミテ千鳥塚に至る。ちり千鳥上野の塚の茂り哉

文中の上野とは天白川左岸(東側)にある鳴海から北へ古鳴海を通り、野並に至る丘陵地のこと、千鳥塚のある山王山(三王山の旧名で、山王社を祀ったことに由来する)は、上野を南北に結ぶ上野道と東海道の分岐点に位置していた。また、鍋盛は下郷家の分家、栢木家の初代当主、弥兵衛の俳号である。

この年、鳴海を訪れた雪川の様子は、当時の本家第四代当主亀世の日記にも登場する。最初に鳴海を訪れたのは、五月五日のことで、十三日に三河(岡崎・高浜)へ出向くまで連日のように亀世や鍋盛、本町家の和木などと俳諧を楽しんだ。三河周遊の後、六月六日に再び鳴海へ立ち寄り、この二回目の鳴海訪問の折、六月八日に千鳥塚を訪れたのである。そして翌九日、伊勢経由で大坂へ戻るべく、雪川は鳴海を出発した。その日のことを亀世は次のように記す

・寛保三年六月九日 雪川子今朝被立。喜平名古屋

屋高田兵部殿送送届。鍋盛、菊長星崎案内二而笠寺送送ル。

この雪川来訪から十三年後の宝暦六年(一七五六)、今度は江戸から鳥酔という俳諧師が鳴海の蝶羅を訪ねてきた。蝶羅は蝶羽の第十六子で、蝶

羽が本格的に酒造に取り組んだことから、その支店としての江戸店を軌道に乗せるべく、若くして度々江戸へ出向いた人物である。酒造業のみならず、叔父亀世の薫陶を受けて俳諧にも秀で、江戸近在に知己も多かったようである。下郷家五代目当主和菊は次のように記す。

・宝暦六年四月十三日 今日寂照御祥月二付上

下とも白飯(略)夜二入江戸俳諧宗匠鳥酔と

申仁、弟子星飯、鳥明と申、兩人同道三人被参

(略)三人とも二次郎兵衛宅(蝶羅、東店)止

メル。歌仙有、夜更ルよし。

・同四月十四日 夜前次郎兵衛宅二一宿被致候誦

人三人共二拙宅(本家、和菊)へ見寄被申、蕉翁

笈見せホ向有。自分も一旬致し違。(略)笈之

ホ向も三人共二被致候。私宅にて饅飴振舞。

相伴鉄叟(亀世、雪房)本町家分家、源十郎、後の

山父、蝶羅。七つ比より、宮造出立被成候。蝶

羅千鳥塚送送ル。

江戸から上方へ向かう客人を丁重にもてなし、出立の見送りには千鳥塚まで出向いたのである。

この時の客人、鳥酔はその著書『風字吟行』(宝暦六年跋)に、千鳥塚についてはかなり詳細な一文を認めている。

千鳥塚眺望 寢寃ハ松風の里、喚統きは夜明て

から、笠寺ハ雪のふる日 星崎の闇を見よとや

啼千鳥、こゝに真蹟を拝す。此句を得給ひたる

所は、駅と西へ三町ばかり出て右の山際、山王宮

狐森の側なる岡に遊び給ふ時の事なりけり。

翁ミづから身後のかたみに千鳥塚といふものを築んとて小石を拾ひ重ね給ふと、知足をはじめ、笑言、安信、重辰、自笑等念誦して、終に成就せりとぞ。

知叟が孫蝶羅子にいざなハれその塚辺にくくバふて見わたせば、天地の渺々たるの中に置いて、勢南に秀たる鈴鹿、朝籠の山々薄墨とめて画に髣髴たり。

こなたに星崎七郷の人家、寝さめの里、松風の思つゝいて喚統の浜、とのの眼中にあり。(中略)笠寺ハ松のひまひまに透て、目の及ぶ所ミな歌枕なれば、鳴海百首の詠もむむべ也。代々の詞客こゝに來て心をとめざるといふなし。

星崎の昼は菓で見る千鳥哉

芭蕉翁が自ら小石を拾い重ね云々は、ここでも「安信」名が登場することからしても、後代の伝承の域を出るものではないが、芭蕉が山王山辺を訪れた可能性は皆無、とも言い切れない。

千鳥の句を詠んだ翌年、すなわちまもなく元禄に改元されようとする貞享五年(一六八八)七月七日、名古屋に滞在中の芭蕉は再び鳴海を訪れた。この時は同月十四日に名古屋へ戻るまで鳴海に滞まり、その間の七月十一日がちょうど東宮(成海神社)の祭祀にあつたので、知足に同道して東宮参拝に赴いている。千鳥塚はこの東宮から北西へ約一キロほどの場所にあたり、ちよつとそこまでの距離ではある。残念ながらこれ以上の決め手となる記録はなく、推測の域を出るものではないが、芭

蕉の東宮参拝の事実は留意すべきであろう。話を戻そう。

鳥酔以後も客人の鳴海来訪は続いた。同年五月十八日、下総国結城から表徳雁宕という俳諧師が同じく蝶羅を訪ねてきた。同人も「次郎兵衛(蝶羅)江戸二而之知人」だったようで、五月二十三日の和菊日記に次のように、その出立の様子が記される。

・宝暦六年五月廿三日 結城俳人雁宕子今日上京出立。四つ比私宅御立餞別。蝶羅、龜洞(後)の学海、旭年、李青(寺嶋家の人)、千鳥塚迄見送る。我等曲かね(曲手、本町と相原町の境にある鍵の手)迄送る。

さらにこの翌宝暦七年にも、江戸在鴻巣横江半九郎、俳号柳几なる人物が蝶羅を訪ねており、同じように見送った(同じく和菊日記)。

・宝暦七年二月廿四日 今朝江戸客夜前泊り被申外誂人柳几朝飯ニて出立、名古屋へ今日彼参候。蝶羅千鳥塚迄送り行。

同じ俳諧の道を志す者にとつて、芭蕉と鳴海の縁を跡づける千鳥塚は、旅の無事を願って遠来の客を見送るにふさわしい場所であつた。

石碑が設置される宝暦十四年の一年前、宝暦十三年(一七六三)のことである。この年はちょうど芭蕉翁の七十年忌にあたる年であつた。すでに隠居の身となつていた鉄叟(龜世)は四月の初め、藤の花見に東宮山(成海神社)へ出かけ、そのまま千鳥塚まで足をのぼした。四代目当主龜世の隠居日記には次のように記される。

・宝暦十三年四月二日 東宮山藤花見。自分(鉄叟)龜世、千歳(後の学海)、蝶羅、雪房、李青、兵三郎(善之庵の人)。夫より山王山千鳥塚見二行。山王ニて龜相(笹印、喜夢浦家初代善右衛門)より弁当來る。はいかい、詩有。

夏の日もさむしむかしの千鳥塚 鉄叟
小石を積み上げただけの塚は見納め、とでも言いたげな一文である。蝶羽・龜世兄弟の長年の願いは、千鳥塚を千句塚とすることであつたようだ。翌宝暦十四年の十二月十日の和菊日記に「先年風和公(蝶羽)、鉄叟公(龜世)御発起之千鳥塚千句清書しらべ」とあり、此の二日後の十二日に「千句ヲ埋、皆々拜礼致帰。」(龜世日記、学海代筆)とその成就を記す。

事の起こりは芭蕉翁三十三年忌の享保十一年(一七二六)で、一ヶ月順延後の記事にある。

・享保十一年十一月十二日 芭蕉翁三十三回忌跡月差合(他の行事と予定が重なること)二付、今日於誓願寺相勤ル。一海、笑言、鯉志、一温、白之、千句之内百韵出來る。

いざ千句を目指して始めるも、はるかに遠く及ばない。千句は一日してならず、であつた。

- 補足 千鳥塚については以下の論考を参照されたい。
- (1) 森川昭「千鳥塚の疑問―付・栗塚のこと―」平成二十四年十二月刊『夷参』7号
 - (2) 加藤定彦「二つの「千鳥塚」をめぐる―「翁塚」と追善供養―」平成二十五年五月刊『東海近世』第21号

(蓬左文庫 井上善博)

水甕 — 「重之集」を中心に

『水甕』は、大正三年（一九一四）に尾上柴舟（二八七六一―一九五七）、石井直三郎（二八九〇―一九三六）らが中心となって創刊し、現在においても発刊され続けている短歌研究雑誌である。当文庫架蔵の一群は、雑賀重良旧蔵書として受贈したもの。創刊号から昭和五十八年（一九八三）の十月号までおよそ体系的に見ることができると。この他、投稿規定や、『水甕大正史稿・索引』といった、雑誌の歴史に関する資料も多数収蔵しており、雑誌の黎明期を考える上で貴重な資料群といえよう。

刊行初期、大正七年（一九一七）から昭和三十二年（一九五七）までは、柴舟の古筆（平安から鎌倉にかけて書写された歌集）の臨書作品（名筆を手本として練習した作品）を表紙に掲載していた。もちろん取り上げた古筆の解説も別頁に付されており、和歌の内容研究に留まらず、書道史の見地も加味されているのが興味深い。歌人と書家、両輪で活躍していた柴舟が雑誌の中心人物として名を連ねていたからこそその試みであろう。

「粘葉本古今和歌集」を得意としていた柴舟だが、『水甕』表紙においては、平安期の古筆を網羅的に取り組んでいる。

特に「高野切」や「三色紙」といった名だたる名品は複数回取り組んでおり、徳川美術館蔵「重之集」（重要文化財）は、①昭和五年（一九三〇）九月号「あきくれど…」と②昭和十五年（一九四〇）十一月号「松しまの…」表紙掲出）、二度に渡り挑んでいる。①の時には解説で「やや繊弱の趣あり」と評しているものの、②に至っては「真に宝貴すべきものなり」と、印象が変化してしている。また、全体的に繊細な印象を受けることから、筆者は一貫して女性ではないかと推定している。解説だけを通覧して見ても、柴舟が古筆の臨書を通して、持論を深めている様子が克明に窺える。

「重之集」の書風は、やや傾斜の強い行の流れ、細やかな抑揚がある運筆が特徴的である。改めて原本と『水甕』の表紙を見比べると、これらの特徴が緻密に再現されており、柴舟の高い書写技術が遺憾なく発揮されていることがわかる。短い期間ではあるが、「重之集」が展示室に登場する。当誌を活用して比較鑑賞すること、柴舟の「重之集」に対する真摯なまなざしを体感してみてもどうだろうか。

（蓬左文庫 星子桃子）

*令和六年一月四日（木）～一月二十八日（日）まで企画展「るわしの古筆」で「重之集」が展示されますが、当誌の掲出箇所と展示頁は一致しませんのでご注意ください。

蓬左通信

昨年の夏からOB職員や研究協力者を講師に迎え、「初心者向けミニ講座」をはじめました。定員二十五名ということもあってか講師との距離が近いアットホームな雰囲気講座となっています。今年度は残りあと一回を残すのみとなつてしまいましたが、次年度以降も開催する予定です。どうぞお気軽にご参加ください。詳細は決定次第当文庫のHPやX（旧Twitter）でお知らせします。

二〇二四年のNHK大河ドラマは「光る君へ」。『源氏物語』を生み出した紫式部が主人公のドラマとのこと。当文庫には金沢文庫ゆかりの重要文化財「河内本源氏物語」をはじめ、『源氏物語』の伝本や注釈書などもたくさん所蔵しています。絵巻に比べると文字ばかりではありますが、これを機に、皆様に当文庫自慢の蔵書を知ってもらうきっかけになればと願っています。

（蓬左文庫 星子桃子）

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <https://housa.city.nagoya.jp/> 〈蔵書検索もできます。〉

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）※変更することがあります。

■展示室／【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料 館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。
電話・郵便による申込みも可。

